

中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

東城 徳幸・有木 大輔・澤田 英輔・関口 隆一
千野 浩一・平田 知之・福田 孝

中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

東城 徳幸・有木 大輔・澤田 英輔

関口 隆一・千野 浩一・平田 知之

福田 孝

要約

本校国語科では、2007年度の筑波大学生への「国語力」に関する意識調査を受け、2008年度より中高各学年で「書くこと」の指導法開発に取り組んでいる。これまで「インベンション指導」、「具体的な「場」の重視」、「共同的な作業の重視」の三点を共通の課題としながら実践を蓄積して来た。また、昨年度からは高大の接続を視野に、高校段階でのアカデミックな論文レポート作成の基礎能力養成に力を入れてきた。本稿では3年次にあたる本年度の実践概要を報告する。

キーワード：書くこと インベンション 具体的な読者 共同（協働） 論文・レポート作成

1 プロジェクトのこれまでの経緯

1.1 プロジェクトの基本方針

はじめにこれまでの経緯とプロジェクトの基本方針を簡単に説明したい。

本校国語科では、2007年度に筑波大学生を対象としたアンケート調査「筑波大学生の『国語力』に関する意識調査」を行った。「大学生にとって必要な国語力」とは何か、それは高校までの国語の授業で十分に育てられてきたのかを問うことで、大学生のニーズを探ろうとしたものである。そこで明らかになったのは、大学で必要とされる多様な「国語力」のなかでも「書く力」が大学生に重視され、また、それが高校までの指導で十分に身につけられていないと考えられていることであった（注1）。

それを受けて2008年度に「書くこと」の指導を見直すことをテーマとして設定した。これは、教員が一人で評価・添削するという、主流のスタイルを改め、長い時間をかけて生徒が一つの文章を書く過程に関わることを目標としている。本年度はその国語科プロジェクト「中高6カ年を通じた「書くこと」の指導法の開発研究」の3年目にあたる。

プロジェクト開始にあたっては二つの基本方針を定めている。

- ①個々の実践を積み上げるかたちで全体の方向性を模索する。

- ②教員の負担をできるだけ軽くする仕組みを考え、継続が可能な実践を行う。

一口に「書くこと」の指導と言っても対処すべき課題は多岐に渡る。そこでまず教員の自由な実践を積み上げ総合し、生徒の実態に合った課題を模索することとした（①）。ただし、「書くこと」の指導で肝心な点は実践が継続されることであると考え、そのための教員の負担を軽減する指導方法も合わせて模索することとした（②）。

1.2 プロジェクトの課題

基本方針のもとに進めてきた各教員の授業実践のなかから、以下のような共通の課題が浮かび上がっている（注2）。

- A インベンション指導（アイディアを出し、構成を整える段階での指導）を重視する
- B 具体的な書き手と読み手がいる場を重視する
- C 共同的な作業を重視する

上記の課題を共有しつつそれぞれの教員の関心から「書くこと」の実践を重ねて来た。

また、昨年度からは特に高校段階において、大学生に直結する論文レポート作成のための基礎能力を育てる実践を重視している。

D特に高校段階において、論文レポート作成のための基礎的な能力を育てる

課題Dは 2007 年度のアンケートでの大学生のニーズに直結するものである。これを共通の実践課題とすることで、中・高・大と連携した「書くこと」の指導法の流れを明確にすることを目標としている（注2）。

今年度も同様の課題A～Dを教員全体で共有しながら実践を積み重ねることとした。

2 今年度（3年次）の実践報告

2.1 各実践の概要

今年度各教員が行った実践の概要は次の通りである。

学年（教員名）	実践テーマ
実践内容の概要	

中学

中1国語（有木）	古典のプロットを用いた小説作成
「今昔物語集」「宇治拾遺物語」所収の「鼻長き僧の事」と芥川龍之介「鼻」を読み比べ、どのように典拠のプロットを活かしているのかを検討させた。その上で、芥川と違った角度から「鼻長き僧の事」のプロットを使用した小説を書かせた。	
中1国語（東城）	芥川龍之介への返信
後に妻となる塚本文へ宛てた芥川の結婚申し込みの手紙を読ませ、それに対する返信を作成させた。まず、芥川の手紙を読んだ上で、それに対する返信の内容と、返信を書く立場を設定する。次にその内容と立場にふさわしい形式と文体を考え、手紙を書く。	
中2国語（千野）	①辞書的な説明の型を用いて笑いを生み出す原理を説明する ②アフォードンスの発見とその構造分析
①『別役実のコント教室』などを参考に、架空の道具や出来事について、それらがいかにも実在するかのよう信に込ませるような説明文を辞書的な文体で書かせる。②アフォードンスに関する文章を読ませ、誤った行動をアフォードするものを身の回りから探させて、その構造上の問題点や改善点などを説明させる。	

中3国語（澤田）	話し合いによる作文の協同推敲作業
各自が自由にテーマを決めて書く「ライティング・ワークショップ」。話し合いによってお互いの作文を推敲する過程に重点を置き、コーチングの専門家の助言を得て、相手の作文を改善するための質問のあり方について考えさせた。	
中3国語（関口）	グループによる詩の鑑賞と解説
現代詩の形式・内容・詩的表現について学んだあと、グループで任意の詩を選び、口頭発表とレポート提出を行う。詩の形式と内容が不即不離であることを学ばせつつ、自らの把握のポイントを明確にして発表・レポートする力をつけさせた。	
中3チャレ（千野）	画と句の関係を読み取る
『安永三年蕪村春興帖』における俳画と句の間にはいかなる関係があるのかということ、『平家物語』『事文類聚』などの資料を通じて自ら考えさせた。	

高校

高1（関口）	評論文の要約
評論教材について、読解の授業後に簡潔に要点をまとめて提出させ、何点かをプリントとして配布し、全体で共有する。字数制限のある要約とすることで、筆者の論の運びを再構成し、表現し直す力をつけさせた。	
高2（澤田）	パラグラフ・ライティングや論文の基本的な方法
「ミニ山月記論を書く」。先行研究や先輩のレポートを読ませ、論証の形式やパラグラフ・ライティングを教え、引用の方法についても扱うなどの論文指導。	
高2（千野）	中世文学作品の比較を通じて作者の執筆意図を読み取る
『無名抄』『徒然草』『散木集注』に記される「ますほの薄」や登蓮法師の行動に関して、それぞれの著者の受け止め方の相違を論じさせる。	
高3テーマ（東城）	ゼミナール形式の授業から論文作成へ
教員の継続的な指導のもとで、個々の生徒が自分の課題を設定し論文を執筆する。高2におけるゼミナール形式での授業で、資料の扱い方や、論理的で分かりやすい発表形式の仕方を学んだことを前提とした取り組み。	

中3チャレ…中3選択授業「チャレンジ」

高3テーマ…高3総合学習「テーマ研究」

これらの実践のなかには本稿執筆時点でまだ継続中のものもあり、個々の成果や課題をふくめた詳細な検討は別の機会に譲りたい。ここでは前項で述べた課題A～Dの観点から、中・高に分けて実践の概要を整理しつつ紹介していきたい。

2.2 中学校での実践

中学校での実践ではA「インベンション指導」、B「具体的な「場」の重視」、C「共同的な作業の重視」の三点を共通の課題としている。

2.2.1 インベンション指導（課題A）

中学校1年生では、有木と東城が同時期に芥川龍之介のテキストを取り上げ、それぞれの問題意識から作文指導を行っている。

有木は同様の古典のプロットでもテキストによって受容の仕方が異なる場合を「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、そして芥川の「鼻」という実例で示しつつ、生徒の興味を喚起している。それを通じて「自分だったらこのプロットをどう活かすか」という問題意識に生徒を導いて行く授業実践を行った。

東城の実践は田中宏幸氏の、芥川が実際に書いたラブレターに断りの返事を書くという実践紹介に想を得たものである。まず、芥川の小説作品の読解やその背景となる伝記的な事項を学んだ上で、芥川のプロポーズの内容を含んだ手紙を読む。それに対して断りや承諾などの内容や、どういった立場から書くのかといった構想を立てさせる。併行して手紙の書き方のルールを身につけ、返事の手紙を執筆するという内容である。

両者ともに生徒が文章を書き出す以前の取材の段階で、「書くべき内容」を発見し、構想を立てるまでの過程を重視しており、また、両者の授業の連携を通じて、生徒の思考の深まりや知識の応用が期待できる点でも、インベンション指導型の実践となった。

同様に、千野（中2②）もアフォーダンス（知覚者に対し環境が知覚者に与える意味や価値）の概念を用いた授業でインベンション指導型の実践を行っている。誤った行動をアフォードするものを身の回りから探させるという具体的な経験を通じて、その構造上の問題点や改善点などを整理し、発表することにつなげている。

総じて、中学校初期ではインベンション指導を重視した実践が行われている。それは、中高の入り口にあたる段階で「書くこと」に親しむためにはただ課題を与えて文章を書かせるのでは不十分であり、書く意欲

を喚起して書き上げたという充実感を与えることが大切であること・効果的であることを実践者が共通して意識しているからである。

2.2.2 具体的な書き手と読み手のいる場の設定（課題B）

東城（中1）の実践では、手紙の構想段階で、どのような立場から芥川に返事を書くのかを生徒に設定させた。生徒には、後に芥川の妻となる塚本文（本校は男子校であるため、この設定は書き手自らのジェンダー意識を自覚させられたり揺さぶられたりする契機にもなっている）、芥川の友人であり、文の叔父でもある山本某、その他の第三者などの立場を自由に選ばせている。具体的な書き手と読み手のいる「場」を意識させるための試みである。この手続きを踏むことで、生徒は自分の書きたい設定に適した手紙の形式や文体を選ぶことが出来るようになる。

また、澤田（中3）は初年次より「ライティング・ワークショップ」を展開し、その中で一貫して生徒同士が読み合い、コメントするなどの実践を行っている。読み手が教員一人（あるいは抽象的な存在）になることを避け、具体的で様々な読者に読まれることで、生徒は日々書き手として成長して行くことになる。

以上のように、本校の作文教育における「具体的な書き手と読み手のいる場」（課題B）とは虚構的な場（東城）と、現実的な場（澤田）を想定している。千野（中2①）の辞書項目の書き手となるという実践も含めて、前者はすでに書くことに苦手意識を持っている生徒にはインベンション指導としての効果を持つ。後者に関しては、具体的な書き手と読み手の場に生徒が身を置くことで、また、それを自覚させることによって、書き手としての成長を促すものである。

2.2.3 共同的な作業の重視（課題C）

「共同的な作業を重視する」（課題C）については、関口（中3）が初年度から継続しているグループワークの実践をはじめ、それぞれの教員が「検討会」「グループ活動」「相互批評」というかたちで日常的に取り入れている。課題Bとのつながりで、検討・批評される側の書き手の成長を期待していることはもちろんである。さらに、共同的な検討や批評の作業を積み重ねていくことで、読み手としての生徒が他の生徒の作品や文章を評価する力を養うことも目指している。

一歩進んで、読み手として書き手のモニタリングを支援し、その能力を引き出すためには、コーチングス

キルの向上が欠かせない。澤田（中3）の授業は、コーチングの専門家を招き、授業の様子を見てもらった上で、相手の作文を改善するための質問のあり方についてあらためて考えさせるという実践を含んでいる。相手の作文を批判せずに、意図を汲み取りながらその改善を図るということは難しいが、優れた読み手として必要な資質である。

なお、この課題Cは基本方針②である、教員の負担を減らすことで継続的な指導を実現することにも寄与している。

2.3 高等学校での実践

高校での実践でも、課題A・B・Cを意識しつつ、それぞれ取り入れている。それらについては過去の本「論集」に記載された初年度からの実践報告を参照してもらうこととし、ここでは特に高校段階での課題としている論文レポート作成の基礎能力養成に焦点を当てて報告したい。

2.3.1 論文レポート作成のための基礎的な能力を育てる（課題D）

高校1年における関口の実践は、評論文を読解した後、個々が要約文を作成し、その中のいくつかを全員で共有するというものである。要約文と聞くと、誰が書いても同じような文が出来上がることが予想されるが、要点の再構築や文の分かりやすさなどの点で大きな差が生じた。これらの過程を示すことで、「相手に内容が伝わりやすい文章とは何か」という問いを生徒の内部に生じさせ、文章の形式を学ぶに留まらないような反省的思考を生徒に促している。

トピックセンテンスを中心に文の構成を考える欧米流のパラグラフ・ライティングの教育は、近年の高等教育における論文指導では常識となりつつあるが、それを高校の段階で取り入れたのが澤田（高2）の実践である。澤田は他に、論証の形式、引用についての考え方や方法について学ばせるなど、高校生に適したかたちでの論文指導を目指している。

千野（高2）の実践は、『無名抄』『ますほの薄』『徒然草』188段、『散木集注』に記された「ますほの薄」や登蓮法師の行動に対するそれぞれの著者の受容の仕方の相違を論じさせるものである。この授業では、直観的に把握したことではなく、1次資料の十分な読解が必要とされ、「論じる」とはどういうことかの本質を生徒が学ぶよい機会となったようである。

以上の実践は、内容が伝わりやすい文章とは何かと

いうメタ的な問いかけ、論文の形式や作法、厳密な資料の読み取りと、正しく自分の主張を伝えたり、分かりやすく内容を伝えたりするために必要な要素にそれぞれの問題意識から焦点を当てている。また、これらは相互に補完し合うかたちで、高等学校段階における総合的な論文・レポート指導を形成している（注4）。

2.3.2 高3テーマ研究の位置づけ

本校では、高3総合学習として「テーマ研究」を行っている。これは大学における卒論にあたるもので、生徒各自がテーマを設定し、ある程度アカデミックな内容を持った論文をまとめるというものである。論文を書かせるだけではなく、高3の1学期末に校外からの参加者を受け入れて開催される「テーマ研究発表会」では、パワーポイントを使用しながらの口頭発表や、ポスターセッションなども行わせている。その過程では、生徒の研究進度に合わせて、テーマと近い専門分野の教員が適宜アドバイスや支援を行っている。

本校の授業の中では、もっとも本格的な論文レポート作成の機会となっており、高大の接続点として位置づけられる。

本年度、東城は文学研究や現代思想研究をテーマとした生徒のテーマ研究の指導をしている。担当している生徒全員が、高校2年次には東城のゼミ形式の授業を選択し、年間を通じてのトレーニングを受けている（注5）。そのため、論文執筆のための基礎能力として以下3点を生徒がすでに身につけていることが期待されている。

- ・学術テキストのスタイルを学び、また学術的テキストの内容を批判的に読む力
- ・web上のデータベースや図書館などを有効利用し、情報収集・文献収集を行う力
- ・自分のテーマを先行する学術的テキストとの対話のなかから明確にしていく力

第2点に関しては、通常授業では人数の多さなどの制約があり十分に教育できているとは言えないが、第1点と第3点に関しては、前項で報告した実践との強い連関がある。少人数制の高2ゼミナール形式の授業では、学年の生徒全体の論文レポート作成のための基礎能力を育てるという目的は達成しがたい。しかし、通常授業の実践と合わせることで、高い成果が期待できる。

3 中高6カ年のカリキュラム作成に向けて

以上、本年度の実践の概要を報告した。最後に、カリキュラム作成に向けての端緒を提示しておきたい。

今回、特徴的であったのは、中学校の初期段階における諸実践においてインベンション指導が重視されていたことである。これはあくまでも全ての実践を総合する中で見えてきた特徴である。しかし、中高の最初の段階で、書く意欲を喚起して書き上げたという充実感を与えることが、重要であると言う仮説を立てることが可能だろう。

中高の中間段階では、具体的な読者の想定や共同作業を用いた実践が中心となった。この段階では、生徒を書き手・読み手として成長させることが目論まれている。

高校段階における論文・レポート作成能力については、求められる基本的な能力のポイントを絞った上で、それらを伸長させるためのトレーニング方法を様々な実践から模索していく必要がある。本校国語科におけるSSH研究開発との連関も模索していくことになる。

上記のように、中高を3つの段階に分け、それぞれに有効と思われる中心的な指導方法の存在を仮説とした。これらの検証を次の課題としたい。

さて、本年度が終了したところで「書くことの指導」研究開発も開始から3年が経過することになる。これで中学・高校の3年が初めて一巡する。今後は蓄積された実践の有効性を検証し、精選しながら、次の機会を得て具体的なカリキュラムの提示ができればと考えている。

【注釈】

- 1) 筑波大学石塚修准教授・塚田泰彦教授の協力のもとに行われた。アンケート調査結果と分析の詳細は「筑波大学附属駒場論集 47 集」(2007)で報告した。
- 2) 初年次および2年次の実践の詳細は「筑波大学附属駒場論集 48 集・49 集」(2008・2009)で報告した。
- 3) 「筑波大学附属駒場論集 48 集」に詳細な実践報告がある。
- 4) 教科研究プロジェクトと併行してSSH指定校国語科としての研究開発も行っている。中学校段階では「論理的思考力の養成」を目指した授業実践を行っており、本稿で報告した「高校段階での論文レポート作成の基礎能力養成」との連関も強まっている。詳細は本校「平成19年度指定SSH研究開発実施報告書」

第1年次(2007)～第3年次(2009)を参照のこと。

5) 「筑波大学附属駒場論集 49 集」に詳細な実践報告がある。

【参考文献】

1. 田中宏幸(1998)『発見を導く表現指導 作文教育におけるインベンション指導の実際』右文書院
2. 木村正幹(2008)『作文カンファレンスによる表現指導』溪水社
3. 戸田山和久(2002)『論文の教室』NHKブックス